

IR Day 2022 ネットワークサービス事業（含むグローバル5G）における質疑応答

日時 : 2022年9月8日（木）13:00～13:50

形式 : Zoomウェビナーによるオンライン配信

説明者 : 執行役員常務 河村 厚男

同席者 : 執行役員 帯刀 繭子

質問者A

Q: プレゼンテーション資料17ページのグローバル5Gのパイプラインについて、どの程度の売上規模を見込めるのでしょうか？

A: あくまで大まかなイメージですが、年間の売上規模は小規模な通信事業者で2桁億円後半、大規模な通信事業者で3桁億円前半を想定しています。ただし、通信事業者の設備投資に対する考え方によってケースバイケースで異なると思います。特定の時期に集中的に設備投資を行う場合には売上時期が偏る可能性もあるとみています。

Q: Open RAN導入後のサポートやソフトウェアサービスについては、どのように考えていますか？リカーリング収入はどの程度見込めるのでしょうか？

A: 導入した機器やサービスは毎年グレードアップする必要がありますが、継続的にサービスやソフトウェアなどを提供してお客様に高い価値を提供していきます。マネージドサービスのソリューションのように保守も含めて当社が一括して請け負うサービスモデルもあります。すでに日本の通信事業者に対してこのような形で提供しており、これを海外の通信事業者向けに展開することも可能です。機器の導入金額に対して、どの程度のリカーリング収入が見込めるかは、提供するサービスやソフトウェアによって異なりますが、継続的な安定したビジネスの実現に寄与します。

質問者B

Q: プレゼンテーション資料21ページの5Gのポートフォリオについて、商用稼働中の製品/サービスは、日本国内が中心でしょうか？海外向けにも開発は完了しているのでしょうか？

A: 商用稼働中の製品/サービスは、日本市場向けが中心です。海外向けはトライアル案件で稼働中ですが、まだ日本ほど大規模なネットワークでは稼働していません。今後、受注済みの案件やさらに検証を進める案件への展開を進めていきます。自社開発も進めていますが、パートナー製品のインテグレーションも含めて、お客様にトータルでOpen RANの価値提供をしていきたいと考えています。

Q: 中期経営計画の達成に向けて、来年度はグローバル5Gの収益性は改善しますか？

A: グローバル5Gの中期経営計画に変化はありません。2025年度の営業利益率目標10%に向けて、2023年度から収益性は改善していきます。

質問者C

Q: プレゼンテーション資料17ページにOpen RAN商談のパイプライン件数がありますが、本日プレスリリースされたフランスの通信事業者オレンジは含まれていますか？記載のある海外通信事業者は、全て商用案件でしょうか？あるいはまだトライアル案件でしょうか？

A: オレンジは、従来開示していたトライアル案件23社の中に含まれていました。今回、具体的な成果がでたため、プレスリリースを実施しました。テレフォニカは、商用を前提としたトライアルの段階です。ただし、商用ネットワークのデータを使って検証しているので、ほぼ商用と言ってもよいのかもしれませんが。ボーダフォンUKについても2,500サイトを対象にしたトライアルであり、ほぼ商用フェーズに入っていると言えます。ドイツテレコムについても1つの地区を全てOpen RANで構成した大規模なトライアルを実施しています。オレンジは、まだトライアルですが、2023年以降、遅くとも2025年までには商用サービスをOpen RANで実現する計画であり、商用に向けた取り組みと考えています。

質問者D

Q: プレゼンテーション資料14ページの通信事業者のOpen RANの導入意向を示した円グラフは、昨年度のIR Day資料から大きく変わっていません。Open RANの普及に向けて、この1年間で技術的に解消されたのはどのような点でしょうか？汎用ハード

ウェアの性能や製品の組み合わせの複雑性がOpen RANの課題であるという見方が一部にあります。どうか、どうお考えでしょうか？現時点でOpen RANに技術的な課題があれば教えてください。

A: Open RANを導入済み、あるいは導入意向がある通信事業者の比率は全体の85%となっています。通信事業者のOpen RANに対する関心は非常に高く、商用稼働や技術検証、導入への検討が進んでいることが数字に反映されています。この1年間で技術的にOpen RANがどれだけ進化したかという点については、パイプライン数の拡大だけでなく、多くの通信事業者で様々なインターオペラビリティ・テストが実施された点が挙げられます。今後もインターオペラビリティ・テストの実績を積み上げていくことが、当社がOpen RANを進めるための1つの大きなポイントになります。Open RANの普及にあたり、マルチベンダー化と仮想化の2つが非常に重要になります。5Gネットワークを実現する仮想化については、技術的にはほぼ確立できていると考えています。しかし、将来的な観点ではMassive MIMOや多重接続など高性能な機能が求められるため、さらなる競争力の強化が必要と考えています。そのためインテルやクアルコムとのチップ開発における連携強化を図っています。Open RANのインターフェースでのマルチベンダー化についても様々なベンダーとインターオペラビリティ・テストを実施しています。国内外のOpen RANを推進する通信事業者とのエンゲージメントの強化、拡大も着実に進めています。システムインテグレータとしても実績を積み上げていくことは、商用ネットワーク構築のリードタイムが短くなることにつながるため、非常に重要と考えています。

以上